

阿 Q 像の階級性をめぐって 中国における「阿 Q 像論」を中心に

李 爲民

0. はじめに

阿 Q は魯迅が書いた中編小説『阿 Q 正伝』¹の主人公である。『阿 Q 正伝』には、辛亥革命 [1911] 前後の中国農村を舞台として、「精神勝利法」によって生きている阿 Q が描き出されている。小説の内容に従えば、「精神勝利法」とは、精神的には自分が相手よりも優位に立っているという自己欺瞞によって、自らを慰める心理行為である。プライドは高いが、実力がない阿 Q は村の人々に軽蔑され、いじめられている。いつも失敗している阿 Q は「精神勝利法」で精神的に勝っている気分になっており、自己満足している。阿 Q の主要な性格はこの「精神勝利法」にある。

『阿 Q 正伝』は魯迅の代表作であり、さらには中国現代文学の代表作であると言われている。『阿 Q 正伝』、阿 Q 像、「精神勝利法」を論じた論文、著作は数多く、文学、社会学、哲学、政治学、心理学などの様々な分野で研究されている。『阿 Q 正伝』研究は魯迅研究の中で一つの研究課題になったと言える。これらの『阿 Q 正伝』研究論文は、しばしば「阿 Q 論」、「論阿 Q」²と題している。視点の相違を捨象して、あらゆる『阿 Q 正伝』に関する評論は「阿 Q 像論」と見なしてよいであろう。

「阿 Q 像論」の中では阿 Q 像の階級性がよく取り上げられている。二十年代の「阿 Q が体現している中国人の品性は、中国の上中層社会階級の品性でもある」³という論点がその嚆矢である。三十年代、阿 Q の階級性をめぐる胡風、周揚の典型論争を経て、四、五十年代に入ると、「阿 Q 像論」の階級性における論点が鮮明となる。つまり、「阿 Q は農民であるが、阿 Q 精神は一種の消極的、恥ずべき現象である」⁴ということが焦点になる。なぜ阿 Q が農民階級にあることは阿 Q 精神である精神勝利法と矛盾するのか。阿 Q の階級性が注目されるようになる要因は何であろうか。これらの阿 Q

像の階級性の議論はマルクス主義が中国において受容される歴史背景、また毛沢東（1942）が発表した「延安の文学・芸術座談会における講話」の内容が関わっていると思われる。

本稿では、二、三十年代の「阿 Q 像論」を中心に、マルクス主義の受容および毛沢東の文芸講話と結び付けて、阿 Q 像の階級性が議論される過程を見てみたい。

1. 『阿 Q 正伝』研究史の概観

『阿 Q 正伝』そのものの研究とともに、『阿 Q 正伝』研究の歴史についての論文も多く書かれており、『阿 Q 正伝』研究史が研究の一つの分野として形成されつつあると言える。『阿 Q 正伝』研究史の研究を通して、『阿 Q 正伝』研究における各段階の問題点、様々な議論、異なる論点の形成などが明らかになってきた。そのため、本節では、『阿 Q 正伝』研究史の専門著作を概観し、『阿 Q 正伝』研究の主な論点を確認したい。

まず、この分野に先鞭をつけた陳金滄（1982、敬称略、以下同じ）の「『阿 Q 正伝』評価と研究の歴史回顧」、⁵ さらに葛中義（1986）の『「阿 Q 正伝」研究史稿』、江潮（1986）の『阿 Q 論稿』、邵伯周（1989）の『「阿 Q 正伝」研究縦横談』、張夢陽（1996）の『阿 Q 新論』を取り上げることにする。

陳金滄（1982）の「『阿 Q 正伝』評価と研究の歴史回顧」は『阿 Q 正伝』研究史の嚆矢である。陳金滄は『阿 Q 正伝』に関する論を考察し、阿 Q 像の階級性が農民階級であることが注目されるようになって以後（1941）、四つの点から議論が起こったということを指摘している。それは、（1）阿 Q 像の性格、（2）阿 Q の革命、（3）精神勝利法、（4）『阿 Q 正伝』の意義という点である。陳金滄によれば、阿 Q の階級性に注目が集まるようになった原因は『阿 Q 正伝』研究者のマルクス主義理解のレベルが高まったためである。

葛中義（1986）の『「阿 Q 正伝」研究史稿』は『阿 Q 正伝』研究史に関する初めての専門書である。『阿 Q 正伝』研究史を時間軸によって分けて論じたのは葛中義に始まる。葛中義は、（1）1949 年以前が「阿 Q 像論」の初期、（2）1949 年から 1966 年までが「阿 Q 像論」の成熟期、（3）1966 年から 1976 年にかけて、つまり「文化大革命」の時期が「阿 Q 像論」の不毛期、（4）1976 年以降「阿 Q 像論」は「百家争鳴」の段階に入るとしている。1949 年

以後、マルクス主義が中国で政治思想の主流となるにつれて、階級論が主な文芸批評の方法として用いられ、阿Qが置かれる階級の生活状況から分析する論点が多多く出てきたと、葛中義は見ている。つまり、阿Qの階級性は第二期、即ち1949年から自覚的に論じられるようになった。この時期の分け方を見ると、「阿Q像論」の発展段階が中国政治の発展、変化の過程と深く関わっていることが分かる。

江潮(1986)は六十年間[1922~1986]の「阿Q像論」を回顧し、「国民性を改造する」という魯迅の思想を考察した上で、阿Qが辛亥革命時期のおくれたまだ目覚めていない農民であるという論、つまり阿Qの階級論に固執することに疑問を提示し、阿Qが中国国民性の典型であると結論づけている。その理由として、(1)阿Qの精神勝利法は支配階級の影響に全てを帰するわけではない、(2)阿Qの階級性が農民であるという論には本質主義⁶(後述)の傾向がある、(3)精神勝利法は国民性の一種である、(4)阿Qの文学的典型としての特徴は、階級性としての特徴より大きい、との四つの点を挙げている。本質主義とは、ものには本質があるという立場である。本質とは、物をそれ自体たらしめるような属性である。アリストテレスによれば、ものの本質はそれが何であるかの定義によって明らかにされる。例えば、人は理性的動物であるという定義が正しければ、理性的動物であるという属性は人の本質である。一方、雑食性という属性は人の定義に含まれないので人の本質ではなく、たまたま偶然に所有されている属性(偶有性)に過ぎない。つまり、阿Qが農民であるという属性、即ち本質を決めると、阿Qが農民以外の性格を持つてはいけないという本質主義の考えになってしまうくらいがあるため、阿Qの階級論に江潮は反対している。

邵伯周(1989)は、『阿Q正伝』が舞台芸術化されたことに注目し、また国内の「阿Q像論」だけではなく、国外の『阿Q正伝』研究にも言及している。邵伯周は「阿Qは三十歳前後とすべきで、風采はごく平凡で、農民風の質朴と愚昧の持ち主ですが、与太者につきものの狡猾さにも染まっているはずです」⁷と魯迅(1934)が述べたことを踏まえて、やはり阿Qが辛亥革命時期のおくれたまだ目覚めていない農民であるとしている。『阿Q正伝』研究の中に議論が起こるのは阿Qの文学的典型と階級性という二つの概念の混乱にあると、邵伯周は指摘している。

張夢陽(1996)は「阿Q像論」の全体を考察し、心理学を用いて阿Qを

分析している。(1)抑制、(2)退化、(3)隔絶、(4)退却、(5)空想あるいは幻想、(6)反抗、(7)転換、(8)合理化、(9)反動、(10)補償、(11)転嫁、(12)同情という心理構造から張夢陽は阿Qが精神典型であると結論づけている。

以上、張夢陽以外の他の四人の論を見ると、阿Qの階級性をめぐる問題が研究史の中で一つの重要な論点となっていることが分かる。阿Qの階級性とはどのようなものなのか。初期の「阿Q像論」から見てみることにする。

2. 二、三十年代の「阿Q像論」

ここでは、茅盾、周作人、蘇雪林、李長之、胡風、周揚等の二、三十年代の「阿Q像論」を中心に論ずる。

初めて『阿Q正伝』に注目したのは当時『小説月報』の読者であった譚国棠である。譚国棠は『小説月報』の編集者である茅盾宛に書いた手紙で、次のように『阿Q正伝』に言及している。「文章の鋭さが確かにあるが、鋭すぎるようであり、少し真実性を損なっている。過度に風刺しすぎると、不自然になりやすいので、真実ではない」(譚国棠 1922, p.25)。譚国棠は阿Qあるいは「精神勝利法」ではなく、『阿Q正伝』の筆法に注目している。その後発表される諸々の「阿Q像論」に比べると、譚国棠の片言隻語は「論」とは言い難いが、「阿Q像論」の第一歩としては意味を持つと思われる。早速譚国棠の感想に応じたのは茅盾である。茅盾(1922, p.25)は譚国棠宛の返信に次のように述べている。

『晨报副刊』に載っている巴人[魯迅]先生の『阿Q正伝』については、四章しか掲載されていないが、私から見ると、確かに傑作である。あなたが諷刺小説だと思うのは、議論をつくしていない。実社会で阿Qという人を実際に指し示すことはできないことだ。しかし、この小説を読んでいるうちに、私は阿Qが何だか見覚えがあるように感じられる。そうだ、彼は中国人の品性の結晶なのである。この四章を読んで、私は思わずロシアのゴンチャロフの『オブローモフ』を思い出した。

それに、阿Qが体現している中国人の品性は、また中国の上中層社会階級の品性でもある。

『阿Q正伝』研究の中で、初めて阿Q像を論じたのは茅盾であると言え

よう。五四以降早期にマルクス主義を受け入れた評論家、作家である茅盾⁸は、単に『阿Q正伝』の文学評価を与えるわけではなく、阿Qに表れているのは中国人の品性であり、中国上中層社会階級の品性でもあるとする。言い換えれば、上、中層階級のある属性が阿Qを通して表れているとする。阿Qの品性の階級性がこの時点で既に茅盾によって指摘された。

阿Qが「中国人の品性の結晶である」という茅盾の論点に似ているのは、阿Qが「一つの民族の典型である」という周作人（1922, p.28）また阿Qの「精神勝利法」が中国国民の悪い根性の一つであるという蘇雪林（1934）の主張である。これらの論では、阿Qの「精神勝利法」を分析した上で批判している。一方、阿Q像に同情を持つのは李長之である。李長之（1932）は、阿Qが「搾取されて一物もない人間である。（中略）但し、彼[阿Q]は精神勝利法を持っており、人類が抑圧されてわずかに残しているこの弱々しい息の音を放棄していない」と述べている。阿Q像、精神勝利法を批判する論調の中で、李長之は初めて精神勝利法に積極的な面がもったという論を出している。積極的な面が見出されれば、当然ながら、消極的な面と対立することになるため、その後『阿Q正伝』研究において阿Q像、精神勝利法をめぐる議論がより激しくなる。

ここまでの「阿Q像論」を見ると、大方は阿Qが表す性格について分析し、論じている。本格的にマルクス主義文芸理論を用い、阿Q像を論じはじめたのは胡風、周揚である。1935年に胡風と周揚の間に文学の典型性と階級性について論争が起こった際、阿Qが例として取り上げられた。胡風（1935）は、ある農民集団にとって阿Qの性格が普遍性を持つと主張している。それに対し周揚（1936）は、阿Qが独特の経歴、心理状態、習慣などを持っていることによって、ある農民集団にとっても特殊性を有すると指摘している。胡風も周揚もマルクスの「人間の本质は社会関係の総和である」という論理を用い、阿Qを論じている。しかし、この論理の解釈において二人の見解に相違がある。胡風（前掲）は、「人間の本质は社会関係の総和である」ことによって、人間はやはり集団的な人間であり、個人は集団的な共通性を持っており、阿Qは辛亥革命の農民を代表しているとしている。一方で、周揚（前掲）は、「同じ集団の境界の中で、現実の各方面に対して個人はそれぞれのアプローチと体験を持っている。したがって、同じ集団の利害関係の表現者であるとしても、各個人の性格は異なった独特な方向へ発

展していくのである (p.163 164)」としている。つまり阿 Q が一人の人間として特有の個性を持っていることを主張している。周揚が強調する文学典型としての阿 Q は、胡風が支持する社会的な人物としての阿 Q 像に対立している。阿 Q の性格をどのように認識すべきか、という問題が、この時から『阿 Q 正伝』研究の中において解明し難い課題になっている。ところで中国でマルクス主義文芸理論が紹介・宣伝される最初の段階において、周揚と胡風はともにそれに貢献した代表的な人物であると言える。二人が文学典型について起こしたこの論争は、当時の中国文壇に大きな影響を与え、マルクス主義文芸理論の研究が更に注目されるようになった。⁹ 次に、マルクス主義が中国でどのように受け入れられたのか、述べてみたい。

3 . 中国におけるマルクス主義の受容

前述したように、初期の「阿 Q 像論」を見ると、茅盾 (1922) の「阿 Q が代表している中国人の品性は、中国の上中層社会階級の品性でもある」という論点をはじめ、周作人 (1922) は「阿 Q は中国のすべての『系統』新しい言葉で言えば『伝統』の結晶である」とし、許広平 (1939) は「阿 Q は、中国の国民性の弱点を代表するだけではなく、同時に世界的一般民族の弱点も代表している」としている。つまり阿 Q は文学典型として、特に「国民性」の代表であることに重点を置いて論じている。阿 Q 像の社会性、あるべき中国変革の担い手としての国民の精神がこの段階で取り上げられている。なぜ初期の「阿 Q 像論」史においては、『阿 Q 正伝』の文学評価より、阿 Q 像の国民性・社会性のほうが注目されたのであろうか。これにはマルクス主義が中国で受容される歴史的背景と同じ事情が関わっていると考えられる。

1840 年のアヘン戦争は中国近代社会の起点である。その時から、太平天国運動 [1851]、戊戌政変 [1898]、義和団運動 [1900]、辛亥革命 [1911]、五・四運動 [1919]、北伐戦争 [1926] といった革命的運動が相次いで起こっている。その間、外国侵略者との戦争も絶えなかった。英仏連合軍との戦争 [1857]、中仏戦争 [1884]、日清戦争 [1894]、八ヶ国連合軍との戦争 [1900] などである。このように、「内乱」と「外患」が頻繁に起こるのは中国近代史における最大の特徴である。イギリス、フランス、ロシア、ドイツ、日本といった外国資本主義の侵入は、中国の自給自足の自然経済の基礎を破壊し、

封建制の崩壊をうながし、中国資本主義的生産の発展のためにも若干の客観的な条件と可能性を作りだした。しかも中国社会の階級矛盾も激化される。厳しい情勢の中で、「われわれの敵はだれか。われわれの友はだれか」(毛 1926, p.3) という問題を解明するのが当時の急務であった。したがって、如何に社会の現状を合理的、科学的に分析するかが当時の学术界にとって急務の課題であった。他方、1917年にロシアの「十月革命」が起こった。「十月革命」の勝利は客観的にマルクス主義の実行性を証明することになった。「十月革命の砲声がわれわれにマルクス・レーニン主義をおくりとどけてくれた。十月革命のおかげで、全世界の、そしてまた中国の先進的な人々は、プロレタリアートの世界観を、国家の運命を観察するための手段にして、あらためて自分の問題を考え直すようになった(毛 1949, p.502)」。 「十月革命」は、世界で初めてプロレタリアートが強力で国家政権を奪取した勝利であり、ある意味では「階級闘争」の結果でもある。「十月革命」の勝利はプロレタリアートの力を示したと同時に、「階級闘争」が単なる概念ではなく、実際の行動手段として可能になることを示した。

二十世紀の初期に中国で新しい思想として紹介されたマルクス主義は、登場し始めた頃にすでに独特な受容の姿を表している。それはマルクス主義の「階級闘争」説を中心とすることである。周知のように、マルクス主義は、(1) 哲学及び歴史観、(2) 経済学的分析、(3) 階級闘争と革命論、という三つの部分からなっている (『岩波哲学・思想事典』1998, p.1531)。マルクスの重大発見である剰余価値の概念は経済学的分析に含まれる。マルクス主義が本格的に中国に紹介されたのは1919年9月、李大釗が『新青年』雑誌に発表した「私のマルクス主義観」という論文である。李大釗(1919)は「私のマルクス主義観」に「余工余値説」、つまり剰余価値の概念を述べているが、その紹介の中心は「階級闘争」にある。「階級闘争」(当時の言い方では「階級競争」)について李大釗は、次のように述べている。

彼[マルクス]のこの三つの論理は不可分の関係を有する。階級競争説は一つの金色の糸のようにこの三つの原理を根本的に連結している。そのため、彼の唯物史観は、「これまでの歴史は階級競争の歴史である」と唱える。(中略) 実際の運動の手段に関しては、彼[マルクス]は最後の階級競争に訴える他に良策がないと主張している。

「階級競争」は現在「階級闘争」と言い換えるようになっている。当時の社会状況では、唯物史観、経済学に比べ、「階級闘争」説のほうがもっと当時の中国社会の現実を解釈するのに、受け取りやすかった論理であると言えるだろう。そのため、李大釗を始め、最初のマルクス主義紹介者たちはマルクス主義の「階級闘争」説に注目し、盛んに宣伝していた。つまり、「マルクス主義は中国では唯物史観(史的唯物論)の中の階級闘争説として受け入れられ、理解され、行われているのである」(李沢厚 1999, p.973)。マルクス主義は新たな思想として広がり、文学、芸術、教育、歴史といった分野にも用いられていく。

先に挙げたように茅盾(1922)は、「阿Qが代表している中国人の品性は、また中国の上中層階級の品性である」と述べる。ここに言う「品性」とは、国民性と言い換えることができよう。茅盾のこの文章は上中層階級を問題にしていることから言えば、「階級闘争説」が『阿Q正伝』に初めて適用される萌芽と言えよう。三十年代に入って、マルクス主義文芸理論が本格的に受容されるようになり、胡風と周揚の間に論争が起こる。中国人の品性、国民性論は、社会的人物としての阿Q像(胡風)、文学的人物としての阿Q像(周揚)として、一層詳細で豊かになる。中国変革の重要な担い手は人口の多数を占める農民である。下層階級・農民階級にある阿Qは、中国変革の担い手たる国民・農民として、精神とそのあり方が問われ続けたとも言えよう。

李沢厚によると、中国現代史においては常に「啓蒙」と「救亡」¹⁰という二つの主題があった。「啓蒙」というのは、新しい思想・観念・学説を人々に紹介し、広めることである。「五・四運動」における新文化運動は、当時の中国人の思想に与えた影響が史上かつてないほど大きい。しかし、この啓蒙の主題が始まった途端、「救亡」というもう一つの主題と重なることになる。「救亡」とは、滅びようとする国を救うということである。「五・四運動」自体は人々を伝統的な思想から解放するだけでなく、むしろ帝国主義に反対する意味のほうが大きい。厳しい中国の状況の中では順序として、国を救うのが第一であり、思想・学問の研究・普及はその次という事態になっていく。つまり、二つの主題は平行して、或いは重なりあいながら、やがて結局は「救亡」という主題が優先され、思想上の「啓蒙」は次第に弱まり、十分に展開されてなくなってしまう。

中国の厳しい状況を歴史的背景として、「啓蒙」と「救亡」の二重変奏の

なかで、やがて「救亡」の論理が優先された。そのことに関連して、二、三十年代の「阿Q像論」の進展 国民性から更に進んで、中国変革の重要な担い手・農民の精神のあり方が問われつづけたこと と、中国マルクス主義における「階級闘争説」の速やかな浸透は、徐々に「救亡」の論理が優先するようになった中国の厳しい状況を背景とする同じ現象の、二側面と言えるのではないか。後に発表された「延安の文学・芸術座談会における講話」（以下、「講話」と略する）は、内容から見れば、「救亡」論理のもう一つの表れと言える。

4. 「延安の文学・芸術座談会における講話」の影響

1942年に毛沢東は「延安の文学・芸術座談会における講話」を発表した。この講話で毛沢東は文学・芸術家の立場・態度、創作の対象、いかに創作すべきかなどについて述べ、「われわれの文学・芸術は人民大衆のためのものである」（毛 1942, p.91）という論を示している。「人民大衆」については、次のように具体的に述べている。

では、人民大衆とは何か。もっとも広範な人民、全人口の90パーセント以上を占める人民は、労働者、農民兵士及び都市小ブルジョアジーである。したがって、われわれの文学・芸術は、第一には、革命を指導する階級としての労働者のためのものである。第二には、革命におけるもっとも広範な、もっとも確固とした同盟軍としての農民のためのものである。第三には、革命戦争の主力としての武装した労働者、農民、即ち八路軍、新四軍その他の人民武装組織のためのものである。（毛前掲, p.91）

「われわれの文学・芸術は人民大衆のためのものである」という方針を出したのは、当時の情勢をにらみ、人民の闘志をたぎらせるためであった。さらに毛沢東は「人民大衆に危害を及ぼすすべての暗黒勢力を暴露し、人民大衆のすべての革命闘争を賛美しなければならない」（毛前掲, p.111）ことを指示している。すなわち人民大衆の暗黒の面、欠点を書いてはいけない、人民大衆の光明の面、優れた品質を見出さなければならない。また、マルクス主義を学習し、弁証法的唯物論と史的唯物論の観点によって世界を観察し、社会を観察し、文学・芸術を観察しなければならないということが強調され

る。この「講話」は現代中国の文学芸術の方針を定めたものといえる。この方針は「阿 Q 像論」にも影響を与えた。何其芳と李希凡の間に起こった階級論争がその一つの表れである。

1956年に何其芳は「論阿 Q」を發表し、『阿 Q 正伝』研究の中で阿 Q 像の階級性が拡大視される傾向を批判している。何其芳は阿 Q の性格を解釈する上での問題は実際、典型性と階級性をどのように解明するかということであると指摘しており、「精神勝利法は搾取階級にもあり、人民の中の落伍者である阿 Q にもある」(何 1956)と、いわゆる「共鳴説」を出した。これに対して李希凡は、「半封建半植民地の支配者及びそのさまざまな奴隷こそは、阿 Q 主義が成長する階級的な根源である」¹¹とする。即ち李希凡は、「講話」において毛沢東が述べる、「階級社会においては、階級性を持った人間性があるだけで、超階級的な人間性はない」という論に基づいて、何其芳の「超階級」的「共鳴説」に反論したのである。この論争について、丸山昇(1974)は次のように論じている。

何其芳が実作の豊かな実りに向かって、作家のエネルギーを解放するための理論を模索していることはたしかであり、これに対して、李希凡のほうがむしろ、自己完結的な理論としての階級論の強調に終わっていたことは否定し難い。

なぜ「階級論」を使用すると議論が起こるのであろうか。それは、阿 Q が「階級論」の矛盾した立場に立っている人物だからである。阿 Q が生きている舞台は辛亥革命前後の中国の農村である。1840年のアヘン戦争以後、中国は徐々に半植民地半封建社会に変わった。辛亥革命は封建制の象徴である清朝を打倒したが、革命の不徹底さのため、民主共和制政府の内容がともなわなかった。広大な農村部には封建的な生産関係が濃厚に残っていた。この生産関係によって、地主と農民の二つの階級が存在していた。阿 Q は下層農民であり、悪い根性である「精神勝利法」の持ち主でもある。「精神勝利法」は阿 Q の主要な性格として作品の中に書かれている。毛沢東の「階級論」によって解釈するならば、阿 Q が革命の同盟軍たる農民階級である以上、悪い根性である「精神勝利法」をもっているはずがない。「精神勝利法」を体現した人物であれば、農民階級に置かれるわけがない。こうして阿 Q が属している階級と、彼自身が有する性格とに矛盾が生じ、そのために議

論が起こるのである。

何其芳、李希凡の間に起こった論争はこの矛盾から始まった。これは言わば、毛沢東の文芸政策における「階級論」(救亡の論理)が中国社会の現実と文学批評分析に運用されるという段階を超えて、文学批評を束縛し始めている事を示すものである。

5. おわりに

以上、阿Q像の階級性をめぐって分析を試みた。茅盾(1922)が阿Qを論じている時点においては、まだ阿Qの階級性は問題とされていなかった。1936年に胡風、周揚の間に起こった阿Qの典型論争は、すでに本格的にマルクス主義文芸理論を用い、阿Qが農民階級であると互いに承認した上で、論を戦わせている。茅盾の論点が階級説を「阿Q像論」に適用する小さな萌芽であるとするれば、胡風、周揚の論争は階級説に基づいて真っ向から反論しあう大波である。胡風は農民典型として阿Qの普遍性を強調している。一方、周揚は農民典型としても阿Q自身が持っている個性、つまり阿Qの特殊性を主張している。注目したいのは、論争の中で阿Q像の階級性は農民であるという点では二人の見解が合致していることである。つまりこの段階では阿Q像の階級性は農民であることと確認されている。三十年代におけるこの胡風、周揚の阿Q典型論争は、なお文学批評の範囲にとどまっていた。しかし1956年から1964年にかけて、阿Q像の階級性をめぐって何其芳、李希凡の間に起こった論争は、すでに毛沢東の文芸政策「階級論」を背景とし、またそれが中国社会全体に作用し始めていることを示すものであった。こうした流れは、李沢厚が中国現代史について述べる「救亡」と「啓蒙」の二重変奏の論理が、すなわちやがて「救亡」の論理へと傾斜していった事情を、側面から映し出すものと思われる。

注

- 1 初出は1921年12月4日、1922年2月12日『晨报副刊』であり、1923年に小説集『呐喊』所収。
- 2 例えば、艾蕪(1941)の「論阿Q」、路沙編(1941)の『論「阿Q正伝」』、馮雪峰(1951)の「論『阿Q正伝』」、何其芳(1956)の「論阿Q」などである。
- 3 茅盾(1922) 「小説月報」第13巻第2号(《弑傍塚鳥》)p. 25
- 4 何其芳(1956) 「論阿Q」(《胎唾Q》) 『何其芳文集』5, p. 173 人民文学出版社

1983年

- 5 陳金淦(1982)の「『阿Q正伝』評価と研究の歴史回顧」(《唾Q屎勸 得勺才寫梢議煽霧指綱》)は始め『中国現代文学研究叢刊』(1982)第2期に発表され、のち1986年に『魯迅研究の歴史と現状』(《続儻寫梢議煽霧才 彞》)に収められる。
- 6 本質主義の定義は、『岩波哲学・思想事典』p.1509,岩波書店)による。
- 7 「『劇』週刊編集者への回答」 なお、訳にあたっては今村与志雄(1984 『魯迅全集』8, pp. 172-173 学習研究社)を参考にした。
- 8 茅盾のマルクス主義文芸観については、1992年に山東文芸出版社から出版された『中国におけるマルクス主義文芸理論』(《瀧針房麼訥獵篡尖胎壓嶄忽》)に所収 pp.50-58
- 9 李衍柱主編(1992)『中国におけるマルクス主義文芸理論』(《瀧針房麼訥獵篡尖胎壓嶄忽》) p. 203 山東文芸出版社
- 10 李沢厚の「救亡」論理は、1999年に安徽文芸出版社から出版された『中国思想史論』(下)の「啓蒙と救亡の二重変奏」に書かれている。
- 11 李希凡(1957)「『阿Q正伝』に関して」(《購器 唾Q屎勸》《瀧針房麼訥獵篡尖胎壓嶄忽》) 『弦外集』pp. 17-18 新文芸出版

引用文献

- 艾蕪 1941. 「論阿Q」(《胎唾Q》) 中国社会科学院文学研究所魯迅研究室編 『1913～1983 魯迅研究學術論著資料匯編』 3, pp. 511-515 中国文聯出版公司 1987年
- 何其芳 1956. 「論阿Q」(《胎唾Q》) 『何其芳文集』 5, pp. 173-186 人民文学出版社 1983年
- 葛中義 1986. 「『阿Q正伝』研究史稿」 青海人民出版社
- 許広平 1939. 「『阿Q正伝』の上演」(《唾Q屎勸 貧處》) 『1913～1983 魯迅研究學術論著資料匯編』 2, p.1104-1105
- 江潮 1986. 『阿Q論稿』 遼寧大学出版社
- 胡風 1935. 「『典型』、『類型』とは何であるのか」(《焚担頁“灸侏”才“窃侏”？》) 鄭振鐸、傅東華編(1975) 『文学百題』(影本), pp. 216-220 波文書店
1936. 「現實主義の一つ『修正』」(《糞麼訥議匯“俐屎”》) 『胡風評論集』(1984) 上, pp. 341-352 人民文学出版社
- 周作人 1922. 「阿Q正伝」(《唾Q屎勸》) 『1913～1983 魯迅研究學術論著資料匯編』 1, pp. 27-29
- 周揚 1936. 「現實主義試論」 『周揚文集』(1984) 1, pp. 152-169 人民文学出版社
1936. 「典型と個性」(《灸侏才倅來》) 『周揚文集』(1984) 1, pp.163-169 人民文学出版社

- 周立波 1935 .「阿 Q 弁護」(《紋唾 Q 掩擦》)『1913 ~ 1983 魯迅研究學術論著資料匯編』1, pp. 1202-1204
- 邵伯周 1989 .『「阿 Q 正伝」研究縦横談』上海文芸出版社
- 蘇雪林 1934 .「『阿 Q 正伝』及び魯迅創作の芸術」(《唾 Q 屎勸 式続儻幹恬議 纂宝》)『1913 ~ 1983 魯迅研究學術論著資料匯編』1, pp. 1035-1044
- 譚国棠 1922 .「小説月報」第 13 卷第 2 号(《忒傍坵烏》)前掲 p. 25
- 張夢陽 1996 .『阿 Q 新論』陝西人民教育出版社
- 馮雪峰 1951 .「論『阿 Q 正伝』」(《胎 唾 Q 屎勸 》)『雪峰文集』4, pp. 108-122 人民文学出版社 1985 年
- 茅盾 1922 .「小説月報・通信」(《宥佚・忒傍坵烏》)『1913 ~ 1983 魯迅研究學術論著資料匯編』1, p.25
- 丸山昇 1974 .『現代中国文学の理論と思想』日中出版
- 毛沢東 1942 .「延安の文学・芸術座談会における講話」翻訳 日本共産党中央委員会毛沢東選集翻訳委員会訳(1966)『毛沢東選集』3, pp. 81-121 新日本出版社
- 李大釗 1919 .「私のマルクス主義観」(《厘議瀧針房麼呐鉞》)『李大釗文集』(1984)下, pp. 46-85 人民出版社
- 李沢厚 1999 .『中国思想史論』(上、中、下)安徽文芸出版社
- 李長之 1932 .「『阿 Q 正伝』の新評価」(《唾 Q 屎勸 岷仟得勺》)『1913 ~ 1983 魯迅研究學術論著資料匯編』1, pp. 697-707